

# 初期害虫の育苗箱施薬は4年に1回でOK！

## 1 はじめに

近年、防除効果の高い育苗箱施薬剤の普及により初期害虫の発生は減少していますが、慣行的に毎年育苗箱施薬が行われています。被害発生が危惧される年だけ育苗箱施薬を行うと、農薬の使用回数や防除コストを削減することができます。

## 2 隔年防除の特長

慣行的にいもち病の殺菌剤と初期害虫の殺虫剤が入った育苗箱施薬を行うと、施用1回当たり薬剤費は3,200円/10aになります。山間地などいもち病だけを対象にした箱施薬を毎年行い、4年に1回だけ殺虫剤の入った箱施薬を行うと、2,750円/10aです。また、4年に1回だけ、育苗箱施薬を行うと、1年あたりの薬剤費は800円となり、大幅にコストの削減ができます（表1）。

施用事例	1年目	2年目	3年目	4年目	薬剤費
隔年防除パターン1	○	—	—	—	800円
隔年防除パターン2	○	△	△	△	2,750円
慣行	○	○	○	○	3,200円

注) 薬剤名: ○はDr.オリゼフェルテラ箱粒剤、△はDr.オリゼ箱粒剤、—は無処理



図1 イネミズゾウムシの被害

## 3 水稻主要害虫の発生量調査

2014年は殺虫剤の入った育苗箱施薬を行い、2015年以降の3年間は殺虫剤の入っていない育苗箱施薬を行い、初期害虫の発生状況を調査しました（表2）。

表2 試験に使用した薬剤の種類と施用方法 薬剤名の赤字は殺虫剤

	薬剤名	処理方法	使用した年次
試験区	Dr. オリゼ <b>フェルテラ</b> 箱粒剤	移植当日散布	2014年
	Dr. オリゼ 箱粒剤		2015~2017年
対照区	スタウト <b>ダントツ</b> 箱粒剤	播種時処理	2014~2017年

殺虫剤の育苗箱施薬を中止した2015年以降は、イネミズゾウムシの発生量の増加が確認されましたが、中止して3年経過した2017年においても、被害水準（発生株率50%）を超えませんでした（図1）。しかし、発生株率が被害水準に近づいてきており、2018年には被害水準を超える恐れがあるため、4年に1回は殺虫剤の入った育苗箱施薬を行う必要があります。

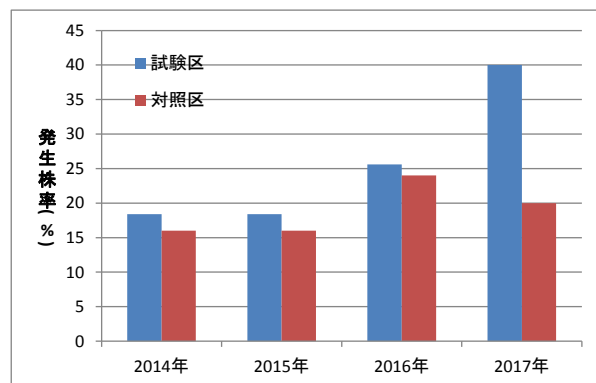


図2 イネミズゾウムシの発生推移

他の害虫の発生は少なく、発生推移は判然としませんでした。